

『松虫鈴虫讃嘆文』における「手本」について

大久保 慶子

一 はじめに

浄土宗の宗祖である法然上人（以下、すべての尊称を省略する）が、建永二年（一二〇七）に土佐国（実際は讃岐国）に配流された「建永の法難」という専修念仏の弾圧事件については、史料や法然の伝記などに記されている一方で、この事件を題材にした『松虫鈴虫讃嘆文』という物語がある。この『松虫鈴虫讃嘆文』とは、「お伽草子」の一種であり、成立年代や作者については未詳であるが、これまでに、室町時代末期頃に成立したとされている赤木文庫旧蔵の写本『松虫鈴虫讃嘆文』⁽¹⁾が確認されており、また、『松虫鈴虫讃嘆文』と同年代に成立したときれている専想寺所蔵の写本『松虫鈴虫物語』⁽²⁾も確認されている。

そして、『松虫鈴虫讃嘆文』の先行研究については、この物語が浄土教系の談義の場で用いるためにつくられた「談義本」であることが指摘されており、他の類似した書との関連性や、松虫・鈴虫や住蓮（本文では「住連」）などの登場人物に関する研究がなされてきたが、物語の内容については、いまだ十分に解明されたとはいえないのである。

そこで本論では、『松虫鈴虫讃嘆文』に記されている「手本」という言葉に着目し、この言葉が表している思想内容を検討することによって、物語の中でどのような思想が形成されたのかについて明らかにしてみたい。

二 『松虫鈴虫讃嘆文』における住蓮と法然の「手本」

建久元年（一一九〇）七月十五日、法然は清水寺で「往生ノ執因⁽⁴⁾」を談ずるついでに「出家ノ功德⁽⁵⁾」を讃嘆した。この説法を聴聞していた一条今出河の左大臣の御内である松虫・鈴虫という二人の女性は、これまでの栄華の日々から地獄を厭いて出家を決意し、法然から戒を授かり出家する。その後、二人の出家を知った帝によって、法然が流罪に処されることが定まる。しかし、この一連の出来事を知った法然の弟子である住蓮は、「昔ノ証空阿闍梨ハ、師法ノ師ノ命ニ、カハリタマヘハ、絵像ノ不動明王ハ、行者ノイノチニカハリ、ソレハ、師法ノ師匠、コレハ、浄土ノ知識ニテ、マシマス。ナラフルニ、知識ノ恩徳、スクレタリ。然ハ、御命ニ、カハリ奉ラント思テ、御前ヲ、タチニケリ。」⁽⁶⁾として、証空阿闍梨が師の命に代わったことを例に挙げ、住蓮も法然の身代わりになることを決意する。ここでは、三井寺の智興内供が重病で倒れた際に、弟子の証空が身代わりになることを申し出て、安倍晴明の祈祷によって師の病を受けるが、証空が日ごろ信仰していた絵像の不動明王がその志に涙を流し、証空の身代わりになったという『不動利益縁起』⁽⁷⁾を念頭に物語が作成されていることが指摘されている⁽⁸⁾。

そして、住蓮は院の御所に参り、松虫・鈴虫を出家させた者であると名乗り出たことによって、法然の流罪は撤回されるが、住蓮は捕縛された後、近江国の馬渚で処刑される場面の中に「手本」という言葉が見られ、その内容については、次のように記されている。

住蓮、申ケルハ、シハラク御イトマヲ、給リ候へ、聖人ノ御方へ、最後ノ御文ヲ、マヒラセントテ、紙ト硯ヲ、コヒヨセテ、最後ノ状ヲ、聖人へ奉ル。ソノ言ニ云、極悪深重ノ衆生、他力往生ヲトケント、オモハン人、住蓮ヲ手本ト、スヘキトテ、一首ノ歌ヲ、ヨミニケリ。

極樂ニ、ムマレンコトノ、ウレシサニ、身ヲハ仏ニ、マカセケルカナト、カキツケテ、三十九歳ニテ、キラレ玉ヒヌ。⁽⁹⁾

住蓮は、処刑前に法然に宛てて「最後ノ御文」を書いており、この文には、「他力往生」を遂げようと思う者に対して、住蓮の行いを「手本」とするべきであるという言葉と共に一首が詠まれている。

また、住蓮の処刑後に文を受け取った法然については、次のように記されている。

サテ、吉真、コノ文ヲ聖人ニ、マヒラセケリ。聖人、是ヲ御ランシテ、アラアサマシノ、事トモヤ、ケニ、コレコソ手本ナレ、サルホトニ、母歎モ、サコソアラントテ、此文ヲ、七条ノ母ノモトヘソ、ヲクラレケル。⁽¹⁰⁾

ここでは、住蓮の文を読んだ法然の言葉として、住蓮の行いこそが「手本」であると説かれていることから、物語では、法然の身代わりになった住蓮の行いが「他力往生」を遂げるための「手本」として示されていることが考えられる。⁽¹¹⁾

なお、法然は「他力」について、『要義問答』で「ワカチカラニテ生死ヲハナレム事、ハケミカタクシテ、ヒトヘニ他力ノ弥陀ノ本願ヲタノム也。」⁽¹²⁾と答えており、また、『浄土宗略抄』では、「たゞ極樂に往生せんとおもはゞ、

一向に称名の正定業を修すへき也。これすなはち弥陀の本願の行なるかゆへに、われらか自力にてはなれぬへくは、かならずしも本願の行にかきるへからすといへとも、他力によらすは往生をとけかたきかゆへに、弥陀の本願のちからをかりて、一向に名号をとなへよと、善導はすゝめ給へる也。自力といは、わかちからをはけみて往生^(を)□もとむ^(る也。他)□力といは、仏のちからをたのみたてまつる也。⁽¹³⁾と説いていることから、阿弥陀仏の本願力を「他力」として認識していたことがうかがえる。そして、「他力往生」については、『十二箇条の問答』に「罪業のおもき事は石のことくなれとも、本願のふねにのりぬれば生死のうみにしつむ事なく、かならず往生する也。ゆめ／＼わか身の罪業によりて、本願の不思議をうたかはせ給ふへからす。これを他力の往生とは申す也。⁽¹⁴⁾」と答えていることから、阿弥陀仏の本願によって、必ず極楽浄土に往生できるということが「他力の往生」であり、法然は往生行として「称名念仏」を説いていた。

以上から、『松虫鈴虫讃嘆文』における住蓮の「手本」については、法然が説いていた称名念仏の教えではなく、『不動利益縁起』に記されている「身代わり」の思想が反映されることによって、師の身代わりになることが「他力往生」を遂げるための「手本」として説かれていることが考えられる。さらに、法然もこのような住蓮の「手本」を認めていることから、師への報恩が重視されているように思われるが、物語の中には、母への孝養に関する記述も見られることから、次節では、物語における師恩と孝養について考察する。

三 『松虫鈴虫讃嘆文』における師恩と孝養

住蓮は、法然の身代わりになることを決意した後、老齡の母に別れを告げるために家を訪れるが、母は住蓮を養

育してきたことについて、「是皆、二世ノ孝養ヲ、エンカタメナリ。シカルニ汝、老トシタル、我ヲステ、師ノ命ニカハリナハ、我、ウラミ死ニ、死スヘシ。死スルナラハ、五逆罪ノ、ソノ一ヲ、ツクルモノナリ。イニシヘヲ思ニ、孝養ヲ、イタセシ人ハ、現当ニ、得益ヲカウムルナリ。」⁽¹⁵⁾と述べており、住蓮が現世・来世ともに孝養を尽くすべきである母を見捨てて、法然の身代わりになって先立つならば、母は恨みながら死ぬことになり、住蓮は五逆罪の一つをつくることになるので、法然の身代わりになることを諦めるように強く説得している。住蓮も一旦はこの説得に応じるが、帰路につく際に思い直したことが次のように記されている。

住蓮、ナク／＼思ケルハ、母ノ命ヲソムカハ、不孝ノトカワカ身ニアリ。聖人ノ御命ニ、カハラスハ、諸願成就セシテ、徒ニ、地獄ニ落ヘシ。我身、ナラクニシツミナハ、父母兄弟ヲハ、イカテカ、タスクヘキ。恩ヲステ、無為ニ入。コレ真実ノ報恩ナリトイヘリ。後生ヲコソ、タスケ奉ラント思テ、コ、ロホソクモ、タ、ヒトリ、院ノ御所ヘソ、マヒラレケリ。⁽¹⁶⁾

ここでは、住蓮の思いとして、母の命に従わないことは不孝であるが、法然の身代わりにならないければ、諸願成就することなく墮獄して、父母兄弟を助けることができないので、「恩ヲステ、無為ニ入。コレ真実ノ報恩ナリトイヘリ。」として、母の来世こそは助けようという思いから、再び法然の身代わりになることを決意している。このような住蓮の思いについては、すでに母の家を訪れた際に「タトヒ、今生ニテコソ、別奉候トモ、来世ニテハ、必一蓮ノウヘニ候ヘシ。又御臨終ノトキ、御迎ニ参候ヘシ。ソノ期ヲ、マタセ玉フヘシト、云ヘハ」⁽¹⁷⁾とあることから、住蓮は法然だけを救うのではなく、母も救おうとしていることが見られる。

なお、『法然上人行狀絵図』（以下、『四十八巻伝』と略称する）の第二巻には、勢至丸が母に「但母よにいまさん程は、晨昏の礼をいたし、水菽の孝をつとむべしといへども、有為をいとひ無為に在るは、真実の報恩なりといへり、一旦の離別をかなしみ、永日の悲歎をのこし給事なかれと再三なぐさめ申⁽¹⁸⁾。」として、母を残して比叡山に登ったことが記されていることから、法然は無為に入ることが「真実の報恩」であると認識していたことがうかがえる。また、『逆修説法』の第四七日においては、『観無量寿経』の「三福」を「一者孝養父母、二者受持三帰。三者発菩提心。孝養父母者、可^レ有^ニ世間出世^ニ孝養^一。世間孝養者、俗家所^レ言孝経等説是也。身体髮膚受^ニ于父母^一、不^レ敢毀傷^ニ孝始也。…（中略）…次出世孝養者、流転三界中、恩愛不能断、棄恩入^ニ無為^一、真実報恩者申、不^レ繼^ニ父道^一、不^レ随^ニ母心^一。…（中略）…修^ニ行^一、仏道者、当時思者似^ニ不^レ知^ニ恩忘^ニ徳^一、暫棄^ニ有漏恩徳^一、終求^ニ無為報謝^一也。是申^ニ真実孝養^一也。」と説示しており、孝養を「世間の孝養」と「出世の孝養」に分けた上で、「出世の孝養」については、恩愛を捨てて悟りの境地に入ることが「真実の報恩」であると説き、父の跡も継がず、母の思いにもしたがわず、仏道を修行する者は、恩を知らず徳を忘れているように見えるが、有漏の恩徳を捨てて、最後に無為の報謝を求めることが「真実の孝養」であると説いている。そして、この文の後には、「又出世孝養、必可^レ棄^ニ父母^一云事不^レ候也。即律中有^ニ生縁奉事法^一。謂父貧^一者置^ニ寺内^一養^レ之、母貧者置^ニ寺外^一養^レ之。彼此随^ニ人意^一、可依^ニ時宜^一也。」⁽²⁰⁾として、『律』の中に「生縁奉事法」があり、父が貧しければ寺内において養ひ、母が貧しければ寺外において養うように説かれていることから、出家者が父母を養うことも「出世の孝養」の一つとして捉えていたと思われる。しかし、この文の続きには、「奉事師長者、此又有^ニ世間師^一、有^ニ出世師^一。世間師者、教^ニ仁義礼智信等^一、乃至随^ニ道々^一、記伝、明経、医道、陰陽道等、教^ニ此等^一之師也。…（中略）…出世師者、教^ニ可^レ下^ニ出生死^一趣^ニ菩提之道^一師也。或訓^ニ聖道之得道^一、或教^ニ浄土之往生^一也。各随^ニ宗教^一。天台真言三論法相等^ニ師也。如^レ是教^ニ出離生

死成仏解脱之道「師僧之恩、勝^{タリ}父母恩^{ニモ}」とあることから、「奉事師長」を「世間の師」と「出世の師」に分けた上で、「出世の師」については、生死を出て悟りへの道を教える師であると説き、このように、生死を離れ出て仏となり、悟りを得る道を教えた師僧の恩は、父母の恩よりも勝っていることが説かれている。その一方で、『示或人詞』には、法然が「一。孝養の心をもてちゝはゝをおもくしおもはん人は、まづ阿弥陀ほとけにあつけまいらすへし、わか身の人となりて往生をねかひ念仏する事は、ひとへにわか父母のやしなひたてたれはこそあれ、わか念仏して候功をあはれみて、わか父母を極樂へむかへさせおはしまして、罪をも滅しませとおもはゝ、かならずゝむかへとらせおはしまさんする也⁽²²⁾。」と述べており、父母に対する孝養については、父母を阿弥陀仏に任せて念仏するように説いていた。

以上から、『松虫鈴虫讃嘆文』における住蓮の孝養については、勢至丸と母の離別の話や、法然が説いていた「出世の孝養」などの思想が反映されることによって、恩愛を捨てて悟りの境地に入ることが「真実の報恩」であるという思想が説かれていると思われるが、住蓮が法然の身代わりになることを決意したのは、師の恩が母の恩より勝っているからということではなく、現世では「出世の師」である法然への報恩を優先し、母への報恩は来世に期していることから、物語の住蓮は、師と母の二人の恩に報いようとしていることが考えられる。

しかし、法然から住蓮の「最後ノ御文」を受け取った母については、「母コハ、コノ文ヲ、ヒラキミテ、カナシミニ、タヘカネテ、二目トモ見ス、文ヲカホニ、オシアテ、ナクヨリホカノ事ソナシ。良久アリテ、母、ノタマフヤウ、我子ノ、ハテヌル所ニ尋行テ、セメテ、ムナシキ屍骸ヲモ、トリカクシ、骨ヲモヒロイテ、ナキアトノ、カタミニセントテ、杖ニスカリテ涙トトモニ、近江ノ国ヘソ、下ラレケル。思ハ日ゝニ、カサナレハ、湯水ヲタニモ、吞事ナシ。イカテカ、カナフヘシ、石山ノホトリニテ、タヲレフシ、八十三ト申ニハ、ツイニ、思死ニ、ハテ

給ヒケリ。⁽²³⁾」として、母は住蓮の死を深く悲しみ、遺骨を形見にしようと近江国へ向かうが、途中の石山で「思死ニ、ハテ」たと記されていることから、物語における住蓮の身代わりは、決して美談として描かれてはいないのであり、このような母の最期が物語に記されることによって、中世後期の社会における理想と現実が如実に映し出されているのではないかと思われる。

四 『松虫鈴虫讃嘆文』における第三者の「手本」

『松虫鈴虫讃嘆文』では、住蓮と法然だけが「手本」を説いているのではなく、物語の文末にも「手本」という言葉が見られ、その内容については、次のように記されている。

松虫、鈴虫力、十九、十七ニテ、出家シケルト、住連力、善知識ノ命ニ、カハリケル事、マコトニ、悪道ヲオソレ、極楽ヲネカフ心サシ、涙モサラニ、ト、マラス。念仏往生ヲトケント、思ハン人ハ、住連ヲ、手本トスヘキモノナリ。タ、信心決定シテ、念仏申タマハ、松虫、鈴虫、住連ト、ヒトツ蓮ニ生セン事、ナニノウタカヒ、
(アルヘキヤカ)
 □□□□。南無阿弥陀仏⁽²⁴⁾。

この一文は、物語の第三者である「語り手」の言葉として、作者もしくは物語を書写した者の思想が反映されていると考えられ、物語の第三者は、「念仏往生」を遂げようと思う者に対して、住蓮の行いを「手本」とするべきであると説いている。この「手本」である住蓮の行いとは、前述した住蓮と法然の「手本」と同じく、師への恩に

報いるために身代わりになることを指しているが、ここでは「他力往生」ではなく、「念仏往生」を遂げようと思う者に「手本」が説かれており、さらに、「手本」という言葉の続きには、「タ、信心決定シテ、念仏申タマハ、」と記されていることから、物語を享受している者に対しては、阿弥陀仏の本願を信じて念仏をとるようになるように教化していることが推察される。

また、『松虫鈴虫讃嘆文』における「阿弥陀仏」や「念仏」に関する思想については、物語の第三者だけが説いているのではなく、出家を決意した松虫・鈴虫が法然のもとに向かう場面の中にも見られ、その内容については、次のように記されている。

松虫、イ、ケルハ、サテハ、ワコセハ、阿弥陀如来ノ、神力自在ニ、マシマス事ヲハ、シリタマハスヤ、穢土ト
浄土ノアヒニ、四重ノ鉄圍山アリ。ソノ上ニ、十万億ノ仏土ヲヘタテタリ。シカリトイヘトモ、穢土ノ衆生ノ、
心ノウチニマフス念仏ヲモ、一念モモラサス、シロシメシテ、ワレラカ、出家ノ心サシノ、マコトナルコトヲ、
知見シテ、菩薩、聖衆ヲ、ツカハシテ、ワレラカ手ヲヒキテ、聖人ノ御坊へ、ヨクリタマフヘシ。タ、仏力ニ
マカセテ、イササセタマヘトテ、迷イテニケリ。ケニトモ、仏ノ手ヲヤ、ヒキタマヒケリ。道ニモマヨハス聖人
ノ御坊ニ、マヒリツキタリ。⁽²⁵⁾

松虫の言葉では、念仏を「心ノウチニマフス念仏ヲモ」と述べていることから、ここでの念仏とは、声に出して
称える念仏だけではなく、心のなかで念ずる念仏としても捉えられており、阿弥陀仏については、二人の出家の志
が誠であることを知見して菩薩と聖衆を遣わし、法然のもとに導く仏として認識していると思われる。⁽²⁶⁾

その一方で、法然の伝記のうち、『松虫鈴虫讃嘆文』と話の構造が類似している『法然上人秘伝』では、松虫の言葉が次のように記されている。

サテハ御前ハ弥陀如来ノ仏力自在ニマシマス事ライマダ知り給ハザリケリ。穢土ト浄土ノ堺ニ四重ノ鉄圍山アリ。其上十萬億ノ仏土ヘダテタリ。シカリト云ヘ⁽²⁶⁾穢土ノ衆生ノ心常住不斷念仏ヲモ、声ヲタカク申ス念仏モ、一声モモラサズ聞シ召シテ、撰取ノ光明ヲモテ照シ給ト承ルゾカシ。マシテ我等出家ノ志ノ誠トナル事知見シ給ヒテ、諸ノ菩薩聖衆ヲ遣シテ、手ヲ引テ上人ノ御房ヘハヲクリ給フベシ。唯ダ仏力ニマカセ奉リテイザ出サセ給ヘトテ、迷ヒ出テ給フ。実ニ仏ノ来テ手ヲヤ引き給ヒケン、道ニモ迷ヒ玉ハズ上人ノ御菴室ニ参リ著タリ⁽²⁷⁾。

『法然上人秘伝』における松虫の言葉では、『松虫鈴虫讃嘆文』と同じく、阿弥陀仏が出家を志す者を導く仏として認識されているが、さらに、常住の「不斷念仏」や「声ヲタカク申ス念仏」の一声も漏らさずに聞き取り、「撰取ノ光明」で照らす仏であることが記されている。

なお、法然は「高声念仏」について、『往生浄土用心』で「さてわかみゝにきこゆる程申候は、高声の念仏のうちにて候なり⁽²⁸⁾。」と答えており、『十二問答』では、「問、念仏ノ行者等、日別ノ所作ニオイテ、コエヲタテテ申人モ候。ココロニ念シテカスヲトル人モ候。イツレオカヨク候ヘキ。答、ソレハ口ニモ名号ヲトナヘ、ココロニモ名号ヲ念スルコトナレハ、イツレモ往生ノ業ニハナルヘシ。タタシ仏ノ本願ノ称名ノ願ナルカユヘニ、コエヲアラワスヘキナリ。カルカユヘニ経ニハコエヲタエス十念セヨトトキ、釈ニハ称我名号下至十声ト釈シタマヘリ。ワカミミニキコユルホトオハ、高声念仏ニトルナリ⁽²⁹⁾。」と答えていることから、念仏行者が自身の耳に聞こえるほどの声

で称える念仏も「高声念仏」として捉えていたことがうかがえる。そして、「光明」の「摂取」については、『選択本願念仏集』（以下、『選択集』と略称する）で「私問曰仏光明唯照_三念仏者_二不_レ照_三余行者_二有_三何意_二乎。答曰解有_二二義_一。一者親縁等三義如_レ文。二者本願義謂余行非_三本願_一。故不_レ照_三摂之_一。念仏是本願。故照_三摂之_一」⁽³⁰⁾と説いており、『三部経大意』においては、「光明ノ縁ト名号ノ因ト和合セハ、摂取不捨ノ益ヲ蒙ラム事不可疑_三」⁽³¹⁾とあることから、法然は称名念仏が阿弥陀仏の本願の行であるので、阿弥陀仏から放たれる光明は念仏者のみを照らし、見捨てることなく極楽浄土に救い摂ると説いていた。

以上から、『松虫鈴虫讃嘆文』の文末に記されている第三者の言葉には、「念仏往生」を遂げるための「手本」として、住蓮の身代わりが説かれているが、物語の享受者に対しては、阿弥陀仏の本願を信じて念仏をとなえるように教化していることから、物語の第三者によって、称名念仏の教えが強調して説かれていると考えられる。

そして、物語における「阿弥陀仏」や「念仏」に関する思想については、松虫の言葉の中で、阿弥陀仏が出家を志す者を導く仏として記されているが、このような阿弥陀仏の性格については、物語の冒頭において、法然が「出家ノ功德ハ、スクレタリト、オホユルナリ」⁽³²⁾と称賛した上で、「出家ノ功德」を子細に説いていることから、物語では、法然が積極的に出家を推奨する人物として描かれることによって、阿弥陀仏にも出家を志す者を導く仏という性格がつくり出されたのではないかと思われる。また、この阿弥陀仏の性格は、『法然上人秘伝』における松虫の言葉の中にも記されているが、さらに、阿弥陀仏は念仏行者を光明で照らし、極楽浄土に救い摂る仏であると記されていることから、物語が法然の伝記に取り入れられる際に、一部の内容が改作されたことが考えられる。なお、『法然上人秘伝』における第三者の言葉については、「松虫鈴虫十九十七ニテ出家シケル事ト、住蓮ノ師ノ御命ニカハリケル事トハ、マコトニ地獄ヲオソレ、極楽ヲ願フノカト思ヒシラレ、涙サラニ留マラヌ事トナリ。南無阿弥

陀仏々々⁽³³⁾」とあり、松虫・鈴虫が出家したことで、住蓮が法然の身代わりになったことに感銘を受けているが、物語に記されていた「念仏往生」を遂げるための「手本」については、一切記されていないことから、物語の第三者の「手本」に関する思想は、意図的に削除されたことが推察される。

五 おわりに

以上、『鈴虫松虫讃嘆文』における「手本」について検討し、法然が説いていた教えなどとの比較を通じて、その思想内容の考察を試みた。物語では、『不動利益縁起』の「身代わり」の思想が反映されることによって、法然の身代わりになった住蓮の行いが「他力往生」を遂げるための「手本」として説かれており、法然もこの「手本」を認めているが、物語の住蓮は、現世では「出世の師」である法然への報恩を優先し、母への報恩は来世に期していることから、師と母の二人の恩に報いようとする人物として描かれていると思われる。

そして、物語の文末には、物語の第三者が「念仏往生」を遂げるための「手本」として、住蓮の身代わりを説いているが、物語を享受している者に対しては、阿弥陀仏の本願を信じて念仏をとるようになるように教化していることから、物語が「談義本」として浄土教系の談義の場で用いられることによって、「手本」に関する思想だけでなく、称名念仏の教えも積極的に説かれていたことが考えられる。

註

(1) 『松虫鈴虫讃嘆文(仮題)』(『室町時代物語大成』第二二、角川書店、一九八四年)。なお、資料の引用に際しては、

旧字体を新字体に改め、振り仮名を省略し、句読点を適宜補って表記を改めた箇所がある。以下の引用についても同様である。また、現在この写本の所蔵場所については不明であるが、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫にマイクロフィルムが所蔵されている。

(2) 『松虫鈴虫讃嘆文』（『真宗史料集成』第五巻「談義本」、同朋舎出版、一九八三年）。

(3) 『松虫鈴虫讃嘆文』の先行研究については、伊藤正順「安楽寺略縁起」の成立過程に関する研究―専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』とその周辺―（『西山学会年報』第七号、一九九七年）、同氏「安楽寺略縁起」に関する二・三の問題―住蓮房の身代わり説と『松虫鈴虫和讃』―（『日本仏教文化論叢』上巻、永田文昌堂、一九九八年）、同氏「伝隆寛律師撰『法然上人秘伝』の一考察」（『西山学会年報』第一二号、二〇〇二年）などの一連の研究や、稲田秀雄「狂言「呂蓮」考」（『山口県立大学国際文化学部紀要』第六号、二〇〇〇年）、三浦億人「松虫鈴虫讃嘆文」項（徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年）、引野亨輔「偽書の地域性／偽証の歴史性―生口島の法然伝説を事例として―」（『福山大学人間文化学部紀要』第五巻、二〇〇五年）、浅野目睦美「『松虫鈴虫讃嘆文』における母の役割―孝養を中心に―」（『弘前大学国語国文学』第三二号、二〇一〇年）、拙稿「法然思想の受容をめぐって―『松虫鈴虫讃嘆文』を中心に―」（『佛教大学仏教学会紀要』第二四号、二〇一九年）など参照。

(4) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六二六頁。なお、『松虫鈴虫物語』には、『松虫鈴虫讃嘆文』と同じく「往生ノ執因」（前掲『松虫鈴虫物語』六七四頁）と記されているが、『法然上人秘伝』では、「往生拾因」（『法然上人秘伝』下（『浄土宗全書』第一七巻、山喜房仏書林、一九七一年、四一頁））と記されている。

(5) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六二六頁。

(6) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三〇頁。

- (7) 『不動利益縁起』とは、『泣不動縁起』や『証空絵詞』とも呼ばれており、『今昔物語集』巻第一九の第二四や『宝物集』巻第四、『発心集』第六など多くの書に収められている物語である。なお、『宝物集』巻第四における証空と母の別れの場面には、「母、此事をきゝて、またくゆるす事なしといへども、生死の有様をいひて、なく／＼かへり来て、すでに師にかはる。」(『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』新日本古典文学大系四〇、岩波書店、一九九三年、一八二頁)とあり、『発心集』第六では、証空が母に対して「願はくは、嘆き給ふ事なかれ。たとひ本意の如く御跡に残りて、後世を訪ひ奉るとも、かく程の大なる功德を作らん事、きはめて難し。今、師の恩を重くして命に替りなば、三世の諸仏もあはれみ、天衆・地類も驚き給ふべし。其の功德をかさねて、母の後世菩提に廻向し奉らん。これ、まことの孝養なれば、則ちあやしき身一つ捨てて、ふたりの恩に報ひてん。」(『方丈記 発心集』新潮日本古典集成、新潮社、一九七六年、二四九頁)などと説得している記述があることから、『不動利益縁起』が諸書に取り入れられる過程で、一部の内容が改作されたことが考えられる。

(8) 前掲注(3) 浅野目睦美論文。

(9) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三二頁。

(10) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三二頁。

(11) 『正源明義抄』の巻第六では、処刑される住蓮と安樂の状として、「我等いかなる身もちて法のために命をおしむべきや、こともなくめにおもひては又もあふべき御法かは、極悪深重の衆生他力往生をとげんとおもはば、住蓮安樂を手本にすべく候とて一首 極楽に参んことのうれしさに、身をば仏にまかせける哉」(井川定慶編『法然上人伝全集』井川定慶、一九六七年、八七三頁)とあり、法然はこの状を見て、涙を流したと記されているが、法然が住蓮と安樂の「手本」を認めているような言葉については、一切記されていない。

(12) 『要義問答』(石井教道編『昭和修法然上人全集』(以下、『昭法全』と略称する)平楽寺書店、一九五五年、六一九頁)。

(13) 『浄土宗略抄』(『昭法全』六〇二頁)。

(14) 『十二箇条の問答』(『昭法全』六七三―六七四頁)。

(15) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三〇―六三二頁。

(16) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三二頁。

(17) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三〇頁。

(18) 『四十八卷伝』第二卷(『法然上人伝全集』七頁)。

(19) 『逆修説法』(『昭法全』二五八―二五九頁)。

(20) 前掲『逆修説法』二五九頁。

(21) 前掲『逆修説法』二五九―二六〇頁。

(22) 『示或人詞』(『昭法全』五八七頁)。

(23) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三二頁。

(24) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六三二頁。

(25) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六二八頁。

(26) 『選択集』の第七章では、「親縁」として「心常念^レ仏^レ即知^レ之。」(石井教道『選擇集全講』平楽寺書店、二〇〇〇、二九八頁)と記されており、衆生が心に常に阿弥陀仏を念ずれば、阿弥陀仏は即ちこれを知ることから、このような衆生と阿弥陀仏との関係性が物語に反映されていると考えられる。

- (27) 前掲『法然上人秘伝』下、四三頁。
- (28) 『往生浄土用心』（『昭法全』五五九頁）。
- (29) 『十二問答』（『昭法全』六三五頁）。
- (30) 前掲『選択集』三〇八頁。
- (31) 『三部經大意』（『昭法全』三二頁）。
- (32) 前掲『松虫鈴虫讃嘆文』六二六頁。なお、『法然上人秘伝』にも「出家ノ功德ハ勝レタリト覺ユル。」（前掲『法然上人秘伝』下、四二頁）と記されている。
- (33) 前掲『法然上人秘伝』下、四六―四七頁。

〈参考文献〉

・眞柄和人「法然浄土教の孝養」（佛教大学総合研究所編『法然上人八〇〇年大遠忌記念 法然仏教とその可能性』法蔵館、二〇一二年）。